
名探偵シャルロット = フォームスン物語

光太郎

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

名探偵シャルロット＝フォームスン物語

【Nコード】

N1642C

【作者名】

光太郎

【あらすじ】

若き名探偵、シャルロット＝フォームスン。この物語は、彼がその頭脳を駆使し、幾多の難事件を解決している。けたらかっこいいが、題名的に、え？探偵物語？と見せかけておいて、その実、頭の弱い探偵がなんとなく日々を過ごすというだいぶ適当なタッチの物語だ！助手のエリスン＝ジョッシュ、謎の生物ジョニー、さらには怪盗まで登場する、ゆるーい感じの探偵コメディ

story 1 幸せの青い鳥

ロンドド郊外には、茶色い建物がある。三階建てのその建物は、モダンな造りになっており、茶色の煉瓦と白い煉瓦を組み合わせた壁には、所々に蔦が絡み付いていた。

正面から見て、窓は九つ。ひとつの階ごとに三つだ。一階には明かりはついておらず、人の住んでいる気配というものがまったくない。その扉の右側に階段があり、一階から入らずとも、二階、三階へと直接行けるようになっていた。階段が一度途切れる二階には、明かりが皓皓とついており、その窓はすべて、大きく開け放たれている。

フォームスン探偵社 二階の扉には、そうかかれた看板が、堂々と掛けられていた。

「今日もいい天気じゃないか。なあ、エリスン君」
大きな肘掛椅子にゆったりと座った体勢で、男はパイプを吹かしながら、助手にそう呼び掛けた。緑色を基調とした、チェックの柄のスーツに身を包んでおり、ほとんど手を加えられていない金に近い茶色の髪が、窓から入る風に時折揺れている。黙っていれば美青年なのだが、口を開けばただの馬鹿という、なんとも惜しい逸材だ。名を、シャルロット「フォームスンという。この探偵社を仕切る、若き名探偵（自称）だ。」

「あなたが天気を語るなんてめずらしいわね、シャルロット？ 少しは外の空気を吸おうという気になったのかしら？」

それに対して、随分と冷ややかな応えを返しながら、エリスンと呼ばれた女性は無造作にシャルロットにコーヒーを差し出した。自分の分の紅茶を手に、優雅に来客用のソファに腰掛ける。エリスン「ジョツシュ。柔らかい金髪が魅力の、見た目も中味もゴーギヤスな美女だ。住み込みで働くようになってから、ちょうど三年を迎える、有能な助手（自称）。」

探偵社といえども、そのメンバーは以上の二人のみだ。

名探偵であり、社長でもあるシャルロットは、椅子の上からエリスンを見やった。

「相変わらず、君はおもしろいことをいうなあ、エリスン君。外の空気など、今こうしている間にも窓から入ってきているではないかとぼけているというわけではなく、どうやら本気でそう思っているようだ。笑みをたたえ、本当におもしろそうに、万年運動不足の名探偵はいう。

「はいはい、そうね、その通りね。あなたとまともな会話をしようだなんて思っていないから、安心してちょうだい」

「はっはっはっ、まったく、君はシャイだね！」

話が噛み合っていない。

「ときに、エリスン君。私は先程から空腹を感じているのだがね。

エリスン製アップルパイはないのかな？」

至極偉そうに腰掛けたままで、シャルロットはそんなことをいいだした。エリスンは、あからさまに不機嫌そうに眉をひそめる。

「アップルパイ？ どうしてあたしが、あなたの空腹のためにそんなものを作らなくてはならないのよ？」

「おや、おかしなことをいう。アップルパイ作りは君の趣味だと思っていたのだが、違ったかな？ とにかく、私はそれが食べたくて仕方がない。今すぐ作ってくれたまえ」

どこまでも尊大な態度だ。エリスンの、ティーカップを持つ指に力がこもる。

「シャルロット、あなたね、ここ数日仕事という仕事をしていないじゃないの。せっかく依頼の手紙があっても、読みもしないし。このまま赤字経営を続けていたら、その日に食べるものにも困るようになってしまうわよ。そんな状況で、そんな探偵に、どうしてあたしがアップルパイなんて作らなくてはならないのかしらっ？」

パリンと、とうとうティーカップの柄が取れた。半年に一度開かれるエレレ市で手に入れた安物とはいえ、勿体ない。

ないんじゃないのかしら？」

「おや、まるでそういった変り者の知り合いがいるかのようだね？」

「ジョニーさんだわ！」

立ち上がり、エリソンはシャルロットを豪快に押し退けると、あわてて扉を開けた。やはり、自己完結型の馬鹿に接客などやらせるものではない。せつかく尋ねてきてくれた知り合いを門前払いとあつては、申し訳が立たないではないか。

果たして、扉を開けると、そこにはたしかにジョニーがいた。真っ白で、真丸の身体をしており、人間の顔三つ分ぐらいの大きさの生物学者に見つかればまず捕獲されるであろう奇妙な生物だ。エリソンの肩の辺りで浮遊しているその生物は、一見何も考えてなさそうな、そしてその実何も考えていない大きな瞳を輝かせ、

「ヒューー！」

と挨拶した。

そしてそのまま、ふわふわとした身体をふわふわと浮かせ、室内へと入ってくる。

「ヒューー！」

「いらつしゃい、ジョニーさん。今日は一人なの？」

話し掛けながら、エリソンは扉を閉める。かつて、とある事件で知り合ったこの生物は、それ以来、何度か探偵社に遊びにきていた。

「ヒューー、ヒュヒュウ」

「いや、悪いことをしたね、ジョニーさん。てっきりいたずらだと思っただ。まさか単独で現れるとは思ってなかったものでね」

「そうよね、めずらしいわよね。キャサリンさんはどうしたの？」

キャサリンとは、ジョニーの飼い主(?)だ。

ジョニーは、つぶらな瞳を宙にさまよわせ、それからエリソンを見た。

「ヒューヒュー、ヒュウ。ヒュヒュウ、ヒューー」

短い手を使ってジェスチャーしてくれているようだ。しかし、そんなもので言葉の壁は越えられない。

「とにかく、どうぞ、座って。今お茶を用意するわ」
ナチュラルに話題を変えてみた。

「ヒュイ」

ジョニーも、物事を深く追求する性分ではないようだ。

「おや、いけないな。良い天気だと思っていたのに、雲行きが怪しくなってきた」

「一雨くるかしらね？ キャサリンさんも、あとから来てくれるんでしようけど……大丈夫かしら」

「ふむ……どうやら、本格的に降りそうだな」

肘掛椅子に座りなおし、パイプに火をつけながら、洗面でシャルロットはぼやく。寒さも遠退き、やっと暖かくなってきたかと思えば、近ごろの天気は変わりやすくていけない。

「ヒュイ……」

ジョニーも、心配そうに窓の外を見る。そのうちに、いよいよ雨が振り出してきた。窓を閉めなくては、降り込んできそうな勢いだ。窓を閉めようと、エリスンが急いで近づく。すると、ピンク色のワンピースを着た女性が、道を走ってやってくるのが見えた。

「キャサリンさんだわ！ やっぱり、雨に降られちゃったみたい。

シャルロット、タオルを用意して」

「まったく、なんてタイミングの悪い雨だ……」

しぶしぶ立ち上がり、シャルロットは備え付けの棚へと向かう。ちよっとしたタオルさえ入手困難なほどの財政難だが、そんなことはいつてられない。

シャルロットが、若草色のぶたさんタオルを棚から取り出した、その時だった。

「ジョオオオオ……ニイイイ……っっ！！」

けたたましい叫び声と同時に、探偵社の扉を勢い良く勝手に開け放ち、ピンクのワンピースの女性が飛び込んできた。

「ああ、ジョニー、ジョニーはどこー？」

びしょぬれの客は、遠慮なく社内を水浸しにしつつ、大仰に部屋

の中を見渡す。エリスン、シャルロット、ぶたさんタオル、と順番に見て、最後に、探し求めていた最愛の生物と目があつた。

「ジョニーー！」

がばあつと、ジョニーーに抱きつく。この女性こそ、噂のキャサリンだ。

「ヒューー」

「ああ、ジョニーー、どうして……どうして、先にいつてしまうの！？ どれほど心配したか……！」

「ヒューイ、ヒュユウ」

「いいのよ、いいの。そんな、謝らないで。あなたが無事だとわかっただけで、わたしはもう……」

壮大な再会シーンを目のあたりにして、名探偵とその助手は顔を見合わせる。いつものこととはいえ、よくも飽きないものだ。

「……いらっしやい、キャサリンさん。今日も、びっくりな登場ですわね」

シャルロットの手からぶたさんタオルを取り、それを手渡しながら、エリスンは極力好意的に挨拶をした。キャサリンの歩いた軌跡が、水に濡れて光り輝いているのが、視界の端に映っている。

「あ、あら、わたししたら……すみません、ご挨拶もせずに飛び込んだりして……少し、興奮していたものですから。突然降りだしたこの雨が、私とジョニーーとの間を引き裂くのではないかと気が気じやなくて……！」

「ヒユウ、ヒューー」

「慰めてくれるの……？ ふふ、ありがとう、ジョニーー」
「どうやら、言葉の壁は存在しないようだ。」

「……とにかく、キャサリンさん。あたしの服をお貸ししますから、どうぞお着替えになってください。このままじゃ、風邪をひいてしまいますわ」

「あら、すみません……じゃあ、お借りします」

というわけで、キャサリンは、二階にあるエリスンの部屋へと一

時移動することになった。もちろん、束の間の別れを惜しんで、ジョニーと涙なしでは語れない言葉のやりとりをするのも忘れなかった。

応接間のテーブルには、アップルパイが四つと、コーヒーカップが一つ、ティーカップが三つ並んでいた。

薄いブルーのブラウスと、白いスカートというさわやか姿に着替えたキャサリンは、いそいそとジョニーの隣に腰掛ける。アップルパイは、キャサリンが手土産にと持ってきた手作りの品だ。

「……良かったじゃない、シャルロット。あなたの大好きなアップルパイよ」

皮肉たっぷりに、エリスンがそんなことをいう。シャルロットは驚いたように眉をあげた。

「おや、おかしなことをいうね。もちろん、わたしはキャサリンさんの作ったアップルパイは大好きだが、先ほどいつていたのは、君の作ったおよそアップルパイとはいえない、同じ材料を使用しているということすら疑いたくなるほどの、世にも奇妙な癖になる味を持つエリスン製アップルパイのことだ。ふむ、確かに少々ややこしかったかもしれないな。では、これからはエリスン製アップルパイのことを、エリスンパイと呼ぶことに……」

エリスンは、ほほ笑みながら、ついうっかりシャルロットの足を踏み付け、ついうっかりその足をぐりぐりした。

「はっはっはっはっ」

「どうやらかなり痛かったらしい。いつもの笑いに覇気がない。」

「さ！ せっかくだからアップルパイをいただこうかしら」

「ええ、どんどん食べてください。まだまだありますから」

「ヒューー」

さっそくアップルパイを食べながらも、エリスンはこっそりとキャサリンの様子をうかがう。彼女が手作り菓子を持って訪れるというのは、イコール依頼があるということなのだ。しかし、月に一度

は迷子になるジョニーも一緒だし、何か心をも痛めている様子もない。

「で、キャサリンさん。今日は、どんな依頼があるのかな？」

誰よりも早くパイを食べおわり、あっさりとコーヒーも飲みおわると、若き名探偵は悠然とキャサリンに問い掛けた。菓子「依頼」という法則をシャルロットが理解していたことに、エリスは失礼にも深く感心する。

「そうなんです、毎回毎回あつかましいとは思っていますが、今日もお願いがあつて参りました」

カチャリとフォークを置き、キャサリンは、シャルロットの方へと向き直った。

「幸せの青い鳥というのを、ご存じですか？」

「もちろん」

「名前はね」

同時に、社長＆社員が答える。

キャサリンは、心なしか表情をほころばせた。

「その青い鳥を、捕まえてきてほしいんです！」

「よし、いいだろう」

「……はい？」

いと簡単に安請け合いをした社長を押し退けて、エリスはキャサリンの目を真つすぐに見た。

「……捕まえる、つて？」

「ですから、幸せを運んでくれるという青い鳥を、捕まえてきてほしいんです。もちろん、お礼は致します」

「いや、そうじゃなくて……」

一度窓の外を眺め、気持ちを落ち着かせてから、もう一度エリスはキャサリンのその真摯な瞳を見る。

「あれって、物語でしょう……？」

「ええ、もっとも有名なのは、物語として語られている青い鳥ですね」

「ヒューイ」

「どうやら、彼女は真剣なようだ。」

エリスンは、何だか絶望的な気分でシャルロットを見やる。しかし彼は、いつもどおり、何の根拠もなく自信満々だった。

「この名探偵シャルロット」フォームスンに任せなさい。必ずや幸せの青い鳥を見つけたし、連れてきてみせよう」

「……………」

幸せの青い鳥とは、物語上の架空の生物ではなかったか。そう思いながら、エリスンは釈然としない面持ちで首をかしげる。と、正面で、エリスンの真似をして首（身体全体）をかしげて（傾けて）いるジョニーと目があつた。

世の中は、不思議がいっぱいだ。

ジョニーの存在によって、エリスンは多大に勇気づけられた気がした。

「幸せの青い鳥を見つけてほしいというのは……………一体、どうしてですの？」

「もちろん、素敵に楽しい幸せを手に入れたいと思つたからです。ジョニーとの輝かしい毎日に、より一層暖かな光があふれればいいな、と思ひまして。あ、青い鳥が生息しているという大体の場所はわかつているんです」

「ほう、それは心強いな。どのあたりにいるのかな？」

キャサリンは、鞆から革制の手帳を取り出した。ぱらぱらとページをめくる。

「忘れないように、メモしておいたんですけど……………あ、ありました。えっと、ロンドドの東側に、ディンドンの森がありますよね。その森の奥地。つまり、隣町へと通じる道が通つてない辺りです。で青い鳥を見たとの目撃情報が、多数寄せられています」

「……………情報が寄せられるって……………」

「なるほど、ディンドンの森か。そこならばそんなに遠くはないし、必ずや近いうちに良い報告ができるだろう」

「はっはっはっ、なあに、誉めるべきところは誉めていいのだよ、エリスン君」

やはり、会話が成り立たない。

馬鹿は放っておいて、エリスンは、改めて森を見渡した。いま二人が立っているのは、隣町へと通じる道だ。キャサリンの話では、青い鳥がいるのはこの道から外れた森の奥地ということだが、見るかぎりではごく普通の森のようだ。花はまだ咲いていないものの、木々は新しい葉をつけ始めており、なんとも爽やかな森の風景だ。これで、探しているのが何の変哲もない鳥ならば、いくらでもいそうなものなのだが。

「さあ、では張り切って探そうではないか」

疲れるのも早いが復活も早いシャルロットが、不敵に笑いながらいう。右手に虫取り網、左手に大きな鳥かごを構えて、なおかつ知的な雰囲気を漂わせるあたり、さすがというべきなのだろうか。

「それはいいけど……シャルロット、具体的に、幸せの青い鳥って何なのかしらね？　ただ青いだけの鳥なら、たくさんいるんじゃないの？」

「ふむ……君はどうやら、このディンドンの森における鳥類の生息状況をわかっていないようだね」

瞳を閉じ、ゆっくりと首を左右に振ると、シャルロットは大げさにため息を吐いた。

むっとして、エリスンが唇をとがらせる。

「そんなもの、わかっているわけじゃないの。あにく、あたしは鳥マニアじゃないわ」

「どうも、君は世の中のトレンドー情報に疎い傾向があるね、エリスン君。改善することをお薦めするよ。いま世俗の間では鳥類が大人気なのだということを、知らなかったようだね？」

「……………」

知りたくもない、とエリスンは思ったが、話がややこしくなりそうだったので、口には出さないことにした。

「はっはっ、なあに、気にすることはない。探偵社にはちゃんと鳥類百科事典が購入してあるとも。帰ったら、あわてず騒がずみっちり勉強したまえ」

「……それで、鳥情報にお詳しいシャルロットさまは、何がいいいわけ？」

皮肉をこめた丁寧口調だったが、どこまでも鈍いシャルロットさまは、満足気に頷いてみせた。

「ふむ、良い質問だ。このデインドンの森には、早い話が、青い色をした鳥の生息は確認されていない。一種類も、だ」

エリスは目を見張った。

「何よそれ？ キャサリンさんは、ここにいるっていつていたじゃないの。ウソなんてついてもしょうがないし……どういうことよ？」

「そこで疑問を抱く当たり、君は現実主義者なのだと思いきらされるね。いるはずのない森に青い鳥がいるとすれば、それこそまさに奇跡……つまりそれは、幸せを運ぶ青い鳥ということに、ならないかな？」

「……なるほどね……」

筋が通っているとはいいがたかったが、少なくとも、その青い鳥というのは随分めずらしい存在だということにはなる。幸せを運ぶかどうかは別問題だが。

「では、有能な助手が納得したところで、青い鳥探しの開始というわけではないか！」

こうして、シャルロットとエリスの、青い鳥捕獲計画が始まった。

捕獲計画、一。
餌。

「鳥が好むと思われるあらゆる餌を用意したつもりだが、なかなかうまくいかないものだなあ、エリスン君」

「……そりゃあね、そういうことをすればね、あらゆる種類の鳥が

集まってくるわよね」

「はっはっはっはっ、なるほど。しかしまさか、鳥の色が確認できないほどたくさん鳥に襲われるとは思ってもみなかったなあ！」
危うく鳥の大群に打ち倒されそうになり、失敗。

捕獲計画、二。

おびき寄せ。

「なあに、簡単な原理さ。青い鳥というのは、つまり外見が青いということだ。青ともっともよく合う色というのは、一般的に白だといわれている。つまり、このように地面に白い布を敷いておけば、青い鳥の美的センスが刺激され、放っておいてもおびき寄せられてくると、こういうわけさ」

「……鳥に、美的センスが……？」

根本的な誤りが発覚し、失敗。

捕獲計画、三。

がむしゃら。

「幸せの青い鳥といえば、随分と神秘的な印象を受けるが、所詮は鳥だ。人間の移動力、人間の知恵、人間の力には敵うまい。片っ端からこうやって鳥を捕まえていけば、いつの日か青い鳥を捕まえることができるということは、想像に難くないな。推理以前の問題だ、人はこれを常識というね！ はっはっはっ」

「そうか、その手があったわね！ いつか、いつの日かきつと……！」

だめじゃんそれじゃ、ということに気づき、失敗。

数時間が、虚しく経過していった。

エリスは、木の根に座り込み、力なくうなだれた。ほかにもいくつかの方法を試してみたのだが、成果は一向に上がらない。

「……とつても絶望的な気分になってきたわ……」

そろそろ、身も心も限界だ。

「ふむ、このままではいけない……。焦っても良い結果など得られないものだ。少し、休憩することにしよう」

シャルロットの言葉に、キャサリンからもらったアップルパイの残りを持ってきていたことを思い出し、エリソンはバスケットを取り出した。持ち運び用のカップと、ポットも用意する。

「これじゃ、まるで遠足ね」

ぼやきながら、バスケットを開ける。ほのかな甘いかおりがして、エリソンの表情がいくぶん和らぐ。

しかし、バスケットの中に、見慣れない指輪を発見し、エリソンは眉をひそめた。

「……何かしら、これ？」

銀色の指輪だ。とくに飾り気はないものの、きらきらと光っている。少なくとも、エリソンの持ち物ではない。

「？　どうかしたのかね？」

なかなかアップルパイが出されないので、不審に思ってシャルロットがバスケットを覗き込む。その瞬間、バスケットの上を風が吹きぬけ、シャルロットは声をあげて後ろに仰け反った。

「うわ！　な、何だ？」

尻餅をつき、顔を押しえながらバスケットを見る。すると、先程までそこにあっただはずの銀色の指輪がなくなっていた。

「何かしら、今の？　風が……」

シャルと、もう一度風が吹いた。

「青い鳥だ！　エリソン君、青い鳥がいたぞ！」

「なんですって！？　じゃあ今の……きゃあっ」

今度はエリソンのすぐ横を風が吹きぬけ、エリソンは思わず叫ぶ。どうやら、鳥が飛ぶことによって風が起きていたようだ。一瞬だが、鳥の姿が見えた。鮮やかな青色だ。

「本当だわ！　やっと出てきたわね……！」

がばっと立ち上がり、シャルロットから虫取り網をひったくると、

エリスはひたすら網をふるった。目的はほとんど忘れていた。今の彼女の行動原理は意地のみだ。

しかし、網を右に降れば後ろに、左に降れば上にと、青い鳥は素早く移動し、一向に捕まえることができない。

「もつ、おとなしく捕まったらどうなのっ！」

思い切りふるった最後の一撃が、木に激突し、エリスは反動でよろめいた。細かな震えが手に伝わってくる。

「いったあーいっ！」

「もう少し落ち着いたらどうだね、エリスン君」

エリスンの体をささえながら、シャルロットがやれやれというふうに息を吐いた。網を取り返して、地面に置く。

「レディが振り回すものではないだろう。物事を考えるということができるいな、君は」

「だって、馬鹿にしてるわ、あの鳥！」

エリスンが、木の上を睨み付ける。確かに、遠くへ逃げるわけでもなく、木の枝からこちらを見ている様子は、馬鹿にしているようにも見える。

「なんなのかしら、あの鳥。思ったより大きいわ。でも、見たことある感じよね……」

「ふむ。思うに、あれは……」

何事か思いついた様子で、シャルロットはバスケットをあさった。

「やはりな、指輪がなくなっている」

「指輪って、あれ、あなたのものなの？」

「なに、少し思うところがあつて入れておいたのだがね」

シャルロットは、不敵に笑った。

「君の正体がわかってしまったよ、青い鳥君。君はずばり……」

びしつと、青い鳥に人差し指を突きつけ、

「カラスだな！」

……空虚な、沈黙が落ちた。

つつこむことも忘れ、エリスは、茫然とシャルロットの指が示

す先を見た。

確かに、カラスのようにも見える。

だが、どうにもこうにも青色だ。

青い鳥は、二種類の真つすぐな瞳を受け、応えるように、

「カア」

と一声、鳴いた。

「なあに、たいしたことじゃない。光りものを好むといえはカラスに決まっているからね。推理というのもおこがましいほど簡単なことだ。はっはっはっはっ」 探偵社に帰りつき、いつもどおり偉そうに肘掛椅子に腰をかけ、いつもどおり偉そうにシャルロットは笑い声をあげていた。

その隣で、鳥かごにすっぽりとおさまった幸せの青いカラスがじたばたしているのを眺めながら、エリスは様々なことをぼんやりと考えていた。

なぜ、カラスが青いのか。

なぜ、カラスが青いことに関してはノータッチなのか。

深く考えてはいけないような気がしながらも、疑問が超特急で疑問度を上げていく。

「……キャサリンさんも、なんでこんなもの欲しがるのかしらね」

とりあえず、色の謎は置いておいて、趣味の謎に迫ってみた。

「幸せが欲しいからだろう？ 本人もそういつていたではないか。

この鳥が幸せを運ぶかどうかはともかくとして、この鳥が幸せの象徴であると思うかどうかが重要なことなのではないのかな。人は、信じるだけでたいいていのことはやってのける生きものだからね」

「アホウ、アホウ」

幸せの象徴は、確かに幸せそうに鳴いている。

「シャルロット、ちゃんとキャサリンさんに連絡したんでしょね

? 見つかったらすぐに来るとかいつていたけれど、大丈夫なの?」

「キャサリンさんは来ないよ」

さらに、シャルロットはとんでもないことを口にした。

「……は?」

「コーヒーが飲みたいな、エリスン君。ブラックでひとつ、いれてくれたまえ」

「どういうことよ、それ!？」

「……ふむ」

シャルロットは、おもしろそうにかた眉を上げる。それから、自分で立ち上がり、コーヒーカップを取り出しながら、ついでのように入った。

「今回のことは、私が企てた狂言だ。キャサリンさんには手伝ってもらっただけだよ。だから、幸せの青い鳥を受け取りに、彼女がここに来るわけがない。そんな依頼、本当は存在しないのだからね」

「……」
剣呑な目つきでシャルロットをにらみ、エリスンはシャルロットの手からコーヒーをひったくると、それをテーブルに置き、ゆっくりと腕を組んだ。

説明してもらおうじゃないの、とその目がいつている。

シャルロットは、肩をすくめた。

「最近、鳥類が流行しているという話はしたかな? 私はね、このロンドドについて、あらゆる鳥類の調査をした。その結果、ディンドンに森に世にもめずらしい青いカラスが一羽、生息しているという情報を得た。それで、どうしても手に入れたと思ったんだ」

悠然と鳥かごをつかみ、それをテーブルの上に移動させる。意外なことに、青いカラスは止まり木でおとなしくしていた。

「なぜ、と聞いたそうだね? もちろん、これが幸せを運ぶのだと信じていたからだとも。私はロマンチストだからね。……今日が何の日か、君は知っているかな?」

「……? 何の日なの? その詭弁と何の関係が……!」

怒りが限界を超え、エリスンがシャルロットを怒鳴り付けようとしたのを遮って、彼はにっこりと笑って鳥かごを差し出した。

「君がここに来て、ちょうど三年目の記念日だよ、エリスン君。これは、私からのささやかな贈り物だ」

「……は？」

静かに瞳を瞬かせ、すっかりと毒気を抜かれ、エリスンは思わず鳥かごを受け取った。

シャルロット探偵社で、助手として働き始めたのがいつだったのか、そんなことは忘れてしまっていた。

「あたしに……？」

「最近の君はぴりぴりしていたからね。たまにはああいう冒険もいだらろうと思ったのさ。楽しんでいただけたかな？」

「……」

ちつとも楽しくはなかったが、エリスンは思ったよりも感動してしまっていたようで、いつもの憎まれ口をいうタイミングを逃していた。茫然と、鳥かごを抱いている。

「これからも、私のためにエリスンパイを作り続けてくれたまえ、エリスン君」

「シャルロット……」

エリスンの胸を、何か熱いものがこみあげる。

「アホウ」

幸せの青いカラスが、鳴いた。

ムードがきつぱりとぶち壊れた。

「……複雑な気持ちだね、シャルロット」

「喜んでもらえて何よりだ！ はっはっはっはっはっはっ！」

この馬鹿でかい特殊カラスをどうしたものかと、これからの探偵社の状況を憂えて、エリスンは深く深く溜め息をもらすのだった。

名探偵シャルロット＝フォームスン物語

名探偵シャルロット＝フォームスン物語

s t o r y 1 幸せの青い鳥（後書き）

よかったね、エリスン。

story2 ジョニーさんの恋物語

「ジョニーが、ジョニーが、変なんですっ！」

ボタンと探偵社の扉を開け放ち、大きく振りかぶって差し入れのマドレーヌをシャルロット目掛けて投げつけると、キャサリンはそう叫んで崩れるようにその場に座り込んだ。

平和な、平和な昼下がり。静寂は、いつもどおり唐突に破られた。何が起こったのか咄嗟には判断できず、エリソンは瞬きも忘れて、泣き崩れるキャサリンを見つめる。若き名探偵、シャルロット＝フォームスンはというと、視界がマドレーヌに阻まれ、まったくもって現状がつかめない。

雑誌『週間ゴージャス』をゆっくりとソファに置き、立ち上がると、エリソンはキャサリンのもとへと歩み寄った。

「……キャサリンさん」
優しく話しかける。

「今の話から推測すると……つまり、ジョニーさんは、いつもは変ではない、と？」

「ああっ、着眼点が違います、エリソンさん！」

涙を拭って顔を上げ、きらきらした瞳を真っすぐエリソンに向けると、キャサリンはきゅっ唇を噛み締めた。

「とにかく、もう、どうしたらいいのか……！ 途方に暮れてしまつて、ろくにものを食べることもできず、差し入れのケーキだって分量を間違えてマドレーヌサイズに……！」

顔面にへばりついているマドレーヌをひっぺがし、シャルロットはまじまじとそれを見つめる。なるほど、マドレーヌにしては形が円柱型だ。

「……ふむ。何か、事件が起こったらしいということはわかった。詳しい事情を聞かせていただきたいな。エリソン君、お茶を用意してくれたまえ。ああ、もちろん、私はブラックで頼むよ」

顔に丸い痕をくつきりと残しながら、シャルロットは偉そうに指しを出す。

キャサリンは小さくうなずくと、エリスンに肩を抱かれながらなんとか立ち上がり、ソファに腰掛けた。身体は小刻みに震えており、今にもまた泣きだしてしまいそうだ。

「……………それで？ 何があつたのかね？」

「実は……………あ、あの、まだはつきりしたことはわからないので、ただの杞憂かもしれないのですが……………」

「なに、気にすることはないさ。遠慮せずに話してくれたまえ」

そういわれても、やはり迷いはあるのか、キャサリンはかすかに瞳を宙にさまよわせる。それから彼女は、意を決したように、口を開いた。

「実は、ジョニーが、浮気をしているみたいなんです」

がっしやーん、とダイニングの方からカップの割れる音が聞こえてきた。

シャルロットは、悠然と火のついていないパイプをふかして、しばらく目を閉じて黙り込む。

長い沈黙が続いたのち、彼は厳かに咳払いをした。

「……………疑問点が、いくつかあるのだが……………」

「なんででしょうか？」

「浮気ということは、つまり……………ジョニーさんにはもともと、本命というか、そういう相手が、いるということかな？ そしてそれは、あなただと」

「え……………」

キャサリンは、ぼつと顔を赤らめた。

「ええ、ハイ……………」

恥じらう乙女も相手があれば、笑い話か怪談だ。

「仲が良いとは思っていたけれど、本当にそういう仲だとは思いませんでしたわ……………」

いれなおした紅茶とコーヒーを置きながら、エリスンが重々しく

つぶやく。

キャサリンは、頬を真っ赤に紅潮させ、恥ずかしそうに首を左右に振った。

「それは、だって、恥ずかしくて、お二人にお話したことはありませんでしたし……。でも、てっきり、わかっていらっしやるものだと……」

「……………」

シャルロットとエリスンは、思わず目を逸らし遠くを眺める。愛だのなんだの予測の範疇を超えているのだ、あの生物は。

「あ、それで、ほかの疑問というのは、なんでしたか？」

「……いや、気にしないでくれたまえ。たいしたことではない」

そもそもジョニーは雄なのか、コミュニケーションはとうとうているのか、浮気をするような相手はいるのか……疑問はそれこそ無限大だったが、キャサリンとジョニーが愛し合っているという事実を前にすれば、どれもこれも取るに足らないことに思えた。

「どうして、浮気をしているなんて思うんですの？　ほかの女性

女性というか、何者かは別として　そういう、影でも？」

エリスンの言葉に、恋する乙女は瞳を伏せる。

「女性の影というわけではないんですが……最近、ジョニーは毎日決まった時刻にわたしの前から姿を消すんです。あとをつけようとしたのですが、何度やってもうまくいなくて……。それに、なんだか最近よそよそしくて……」

最後の方は涙声となって擦れてしまった。若き探偵とその助手は、顔を見合わせる。

「ふむ……。それはなんとも、おもしろ……。いやいや、大変な事態だな」

「そうね。どうにも興味のある……。コホン、重大な事態ね」

「よし、わかった！」

シャルロットは自信たっぷりな笑みを浮かべ、身を乗り出すと、

テーブルごしにそつとキャサリンの肩に手を置いた。

「この名探偵、シャルロット＝フォームスンに任せなさい。ジョニーさんの様子がおかしいのはなぜなのか、必ず突き止めてみせよう！」

「ああ、ありがとうございます……！」

こうしてシャルロットは、またもや依頼の安請け合いをしたのだった。

浮気調査 全国探偵協会のデータによると、探偵への依頼の半数以上を占める項目がこれだ。駆出しのうちには誰もが浮気調査、行方不明者捜索などを手懸け、地道に知名度を上げていく。そうしてベテランと呼ばれる段階になって初めて、流行の探偵物語で知られるような怪事件、難事件に挑むようになるのだ。

名探偵シャルロット＝フォームスは、探偵稼業を初めて早五年。年数的にはベテランといってもいい域だが、実績的には駆出しというのもおこがましい。

自称「名探偵」は、今までに浮気調査すらろくに解決したことがなかった。

「まずはどうするべきだと思っね、エリスン君？」

シャルロットは三段重ねパンケーキにシロップをかけながら、ことこのついでのようにいった。キャサリンからの依頼を受けたその翌朝、ほぼむりやり噴水広場の横にあるカフェにつれてこられたエリスンは、慥然として答える。

「とりあえず、呑気かつリッチに朝食をとっている場合ではないとは思っわ」

「はっはっはっ、私は朝早くからチョコレートパフェの相手をしなくてはならない君の胃を憂えるがね」

カチャリとパフェ用の長いスプーンを置き、エリスンはシャルロットを正面から見据えた。

「三段重ねのパンケーキなんて、そんなくどいもの食べるあなたの

気が知れないわ」

「おやおや、おかしなことをいう。最近体重計に乗る回数が増えて
いるようだが、君の心配事は解決したのかな？」

「動かないくせに食べたり飲んだりばかりしていると、ますますバ
カになるわよ、シャルロット」

「なに、それほどでも」

「誉めてないわよっ！」

怒鳴ってしまったから、カフェ内の客からの視線を感じ、エリス
ンは優雅に髪をかきあげ、気分を落ち着かせた。

「……どうするべきか、って聞いたわね。キャサリンさんの話によ
ると、ジョニーさんは毎朝十時に姿を消すそうね？ その後一体ど
こで何をしているのかを突き止めるために、足取りを追うのが正し
い手順だと思うけど？」

シャルロットは、満足そうにうなずいてみせた。

「ふむ、そのとおりだ。尾行は浮気調査の基本だからな。……キャ
サリンさんの話を聞いて私が注目したのは、いつも決まった時間に
姿を消すという点だ。これが何を意味するか、わかるかね？」

「……ジョニーさんは、毎日決まった時間に姿を消す必要があるっ
てことよね。たとえば浮気なら、どこかで待ち合わせでもしている
のかしら」

「見方を変えてみよう、エリスン君」

シャルロットは不敵に笑ってみせた。話しながらも、パンケーキ
はすでに半分なくなっている。

「いつ姿を消すかがわかっているということは、尾行がしやすいと
いうことだよ。今日は九時半から、二人で噴水広場にいるようにし
てくれと、キャサリンさんにはお願いしてある。私たちはこの窓側
の席から、二人の様子を観察していればいいのさ。そして、十時に
なればジョニーさんがどこかにいくだろうから、そうならたらこっ
そりと尾行する……完璧だろう？」

「……………」

自慢をするほどたいした話でもなかったが、シャルロットにしてはよく考えた方だったので、エリソンはあえて何もいわなかった。馬鹿にするのもかわいそうだが、かといって誉めるほどのことでもない、というところだ。

「そろそろ時間だな……」

噴水の横に建っている時計台は、九時半を示していた。二人は窓越しに、広場を探す。

そこにはたしかに、ピンク色のワンピースを着たキャサリンと、相変わらず白くて丸くて浮いているジョニーがいた。ベンチに腰掛け、バスケットからサンドウィッチを取り出している。仲睦まじく朝食をとるところらしい。

いつ見ても、奇妙なツーツョットだ。

「はい、ジョニー、あーん」

「ヒューー」

「うふふ、おいしい？」

「ヒュイツ。ヒューー、ヒュユ」

「まあ、気づいてくれたの？ そうよ、あなたのために伝説のコシヨウをデスマウンテンに登ってとってきたのよ。喜んでもらえて嬉しいわ」

「ヒューー」

「……なんてことを、やってるんでしょね」

「やってるのだろうな」

ジョニーとキャサリンの口の動きに合わせて会話を創作してみた探偵サイドは、ほんの少し淋しくなって溜め息をもらした。突然ヒューヒューいいたした大のおとなのことを、カフェの従業員が訝しげに見ているが、そんなものを気にするシャルロット様ではない。

「こうやって観察するのは初めてだけど、キャサリンさん、本当に幸せそうね。もしジョニーさんが浮気していたら、女として許せないわ」

水の入っていたグラスの氷をスプーンでつつきながら、エリソン

がそんなことを口にする。シャルロットは、なんとも複雑な表情をした。

「……ジョニーさんが浮気か。それはそれでかなりおもしろいが、浮気ということはないような気がするな。キャサリンさんのような許容範囲の広い人が、そうそういるとは思えん」

「逆に狭いんじゃないかしら？ 偏ってるのね、きつと」
結構むちゃくちゃないようだ。

そうして二人が話しているうちに、ジョニーが目に見えてそわそわし始めた。

身体全体を時計台の方向に向け、時間を確認しつつ、キャサリンの顔色をうかがったり、意味もなく転がったり、見ている分にはかなり滑稽だ。

「……ジョニーさんの様がおかしいわ。いつもおかしいけど」

「そうだな、いつもおかしいが更におかしい。そろそろか」

ジョニーは、必死にキャサリンに何かをいつているようだった。短い手でジェスチャーをしている。キャサリンはというと、困惑したような顔で、首を傾げている。

突然、ジョニーが遠くの空を指差した。いや、指はないので、手全体を使ってびしっとその方向を示した。キャサリンが反射的にそちらを見る。

まさにその瞬間だった。ジョニーは、反対側に猛スピードで飛び出した。

「動きだしたか！ 行くぞ！」

シャルロットとキャサリンもまた、カフェを飛び出す。そうして、尾行が始まった。

追っ手がくることを予想していたのか、ジョニーの動きはかなり難解だった。角を曲がったかと思えば戻ってきたり、いきなり回れ右をしたりと、目的地があるのかどうかも疑わしくなるほどだ。しかし、シャルロットとエリスンのコンビは常人をはるかに凌いでと

るかったので、見失ってしばらくするとまた戻ってきてくれるジョニーの動きは非常にありがたかった。

「どこにいくのかしら。だんだん僻地に向かっていている気がするわ」

「はっはっはっ。疲れたなあ。少し休憩しないかね」

「この先は……そうか、デインドンの森だわ」

あまりに自然に無視されたので、かえってすがすがしい気持ちで、シャルロットはジョニーのいる方角を見やる。なるほど、たしかにデインドンの森へと続く道だ。

「ふむ、ジョニーさんの浮気相手は森の動物ということかな。それならば納得がいくな」

「納得がいく？ そうかしら。ジョニーさんは人間からはかけ離れているけど、かといって森の動物からも程遠いわよ」

「手厳しいな、エリスン君。たとえばリスの趣味など、君にわかるのかな？ ジョニーさんがリスやウサギにとって憧れの的であったとしてもおかしくないだろう。私たちは人間だからね。所詮未知の世界なのだよ」

わかるようなわからないような、奇妙な理屈だった。エリスンはいつもどおり聞き流すことにする。

そのまま尾行を続けていくと、両側に並んでいた店や民家の数がだんだん少なくなっていく。人とはほとんどすれ違わなくなり、やがて森へ通じる一本道に出る。もはや、疑いようがなかった。ジョニーは、森へ向かっているのだ。

「森か……動物ぐらいしか思いつかないがな。まさか、隣街へ行くなどということはないだろうな」

シャルロットがつぶやく。さすがに隣街まで尾行するのはつらい。そもそも森でさえいつもは馬車できているのだ。今日は一日の平均運動量をとくに越えている。

「ジョニーさん、やっぱり森に入ってしまったわね。本当に、浮気相手は動物なのかしら」

エリスンが不満そうにぼやく。森のなかともなると、探偵として

の能力にかける二人はがさがさと音をたてまくっていたが、ジョニーは振り返ることなく真つすぐ進んでいく。

「まあ、まだ浮気と決まったわけではないしな。なにか、キャサリンさんに秘密でなくてはならないことを……おや？」

「小屋に入っただけ……！」

二人は、思わず木の影に隠れた。こんな森の奥地に小屋があるなど、思ってもみなかった。小屋の横には薪が積まれており、人が住んでいる気配がある。どうやら、旅人用の小屋というわけではないらしい。

「……ということは、浮気相手は人間ってことよね」

エリスンがつぶやいた。ずいぶん不機嫌そうだ。

「まだ浮気と決まったわけではないといっているだろう。中を覗いてみようじゃないか」

「いいの？　ひとさまのお家、勝手に覗くなんて」

「なあに、我々は探偵だからな。かまわないさ」

自信たっぷりにもちやくちゃんな理屈を吐いて、シャルロットは小屋の裏側にまわりこんだ。ちょうど顔の位置あたりに、小さな窓がついている。

「ちよつと、もうちよつと向こうにいつてちよつだい。見えないじゃないの」

エリスンに割り込まれ、シャルロットは眉を寄せた。

「静かにしたまえ、気づかれたら厄介だ」

「そんなこといったって、あたしも見たいわよ。ジョニーさんの浮気相手よ、気になるじゃない」

「……ふむ。いいだろう」

結局、二人仲良く並んで覗くことが決定し、注意深く窓から顔を出す。

そこにいた「浮気相手」を見て、二人は絶句した。

「ひよつひよつひよつ、よう来たのう。まあまあ早う座りんな」

それは、見事な白髪を五本の三つ編みにして、銀ラメ入りの紫色

のドレスを来た老婆だった。ジョニーを招き入れ、木製のテーブルにホットミルクを二つ用意し、自分も腰かける。

「ジョニーや、最近はどうだね？ うまくやつちよるか？」

「ヒューイー、ヒューウ」

「ほう、それは大変じゃの。誤解されんように気をつけにや。そのためにももつとがんばらにやいかんきに」

「ヒューイー！」

シャルロットとエリスンは、ぐたりとその場に座り込んだ。シヨックで、身体が震えている。

「……シユールな趣味だわ」

「……コミュニケーションが成立しているとは……」

意見が割れた。

「どういうことなの、あのお婆ちゃんがジョニーさんの浮気相手？ 冗談じゃないわ、キャサリンさんがかわいそうよ！」

「どうして君は浮気と決めつけるのかな、エリスン君。浮気じゃないかもしれないだろう。そう、たとえば、ジョニーさんの育ての親かも……」

突然、なにかに気づいたかのように、シャルロットとはびたりとその動きを止めた。さらに怒鳴ろうと臨戦態勢に入っていたエリスンは、拍子抜けして、訝しげな顔をする。

「……どうしたの？」

「そうか、思い出したぞ……。動物の世話をするのが生きがいという、変り者の老人の話聞いたことがないかね？」

「……？ あ、知ってるわ！ たしか、街から追い出されて行方不明になっちゃったお婆ちゃんよね？ ええと、名前は……」

ボタンと頭上で窓の開く音がした。しゃがみこんでいた二人は、恐る恐る上を見る。

「僕はマリアン又じゃ、お客人。さつきからこそそと、何の用じや？」

窓から顔を出し、マリアン又婦人は、どう見ても怪しい若者二人

を見下ろした。

「ひゃっひゃっひゃっひゃっ！ 浮気！ 儂とジョニーが、浮気！
それは滑稽じゃ！」

小屋のなかに招き入れられ、二人が事情を説明したとたん、マリ
アンヌは笑いだした。身体をくの字に折り曲げて笑っており、見た
ところ健康に悪い。

「ヒューーッ」

心外だったようで、ジョニーは頬(?)を膨らませている。

「浮気かもしれないという危惧があつたのは確かですわ。そう思わ
れても仕方のない行動を、ジョニーさんはとつたということです」
「ひゃっひゃっ、まあそう怒りなさんなや。可愛い顔が台無しじゃ」
「……………」

唇を尖らせて、エリスンがそっぽを向く。こういうタイプは苦手
だ。

「とにかく、どういうことなのか説明していただきたいな。ジョニ
ーさんも、キャサリンさんを悲しませていることぐらいわかってい
るだろう？ 納得のいく説明をしていただけないのなら、今すぐに
でもキャサリンさんをここに……………」

「ヒューイ！ ヒューイ、ヒュユウ！」

あわてて、ジョニーがシャルロットにしがみつく。身体全体をフ
ルフルと左右に振り、上目遣いでシャルロットを見上げ、その瞳を
潤ませた。

「はっはっはっ、事情を説明してくれば良いのだよ、ジョニーさ
ん。そんなに焦ることはない」

「ヒューイ！ ヒューイ、ヒューイヒューイヒュユウ、ヒューイ！」

「ジョニー、こやつらにはおぬしの言葉は通じんじやる。儂から説
明しよう」

マリアンヌが助け船をだす。その言葉に、エリスンが不思議そう
な顔をした。

「どうして、マリアンヌさんは、ジョニーさんの言葉がわかるんですの？」

マリアンヌは、楽しそうに目を細めた。

「おぬしらも知っておろう？ 儂は無類の動物好きでな。街中でサルだのカバだのスカンクだのを飼っていたから追い出されてしまった変わりもんじゃ。人間以外の動物の言葉など、簡単に理解できるんじやい」

「……なるほど」

まったく説明になっておらず、根本的解決にはなっていないかったが、どうせ聞いてもわからないと判断し、エリソンはうなずいておいた。

「まずは、ジョニーとの出会いを説明せにやなるまいな……あれはいつごろだったかの。儂がいつもどおり森を散歩していたら、こやつが道に迷っているのを見つけてな。儂は、年がいもなく胸がときめいたんじや。森に暮らすようになってから、たくさんの動物を見てきたが、ジョニーのような生物は始めて見たからのう。そうしていてもたってもいられんようになって、ついジョニーの背後に回り込んで薬を嗅がせて気絶させ、この小屋に連れてきたというわけじや」

「ヒューー」

ジョニーが、懐かしそうにうなずく。

奇妙な沈黙が訪れた。

「あの、それって、誘拐……」

「それからジョニーが目を覚まし、儂らはまるで古くからの友人であるかのようにすぐに仲良くなったんじや」

「……」

エリソンは、やっぱり気にしないことにした。

シャルロットはもつともらしい顔をして話を聞いているが、内容を理解している確率は極めて低い。

「ジョニーは、儂がジョニーの言葉を理解できることを知ると、儂

に恋愛相談を持ち掛けてきよった。なんでも、相手の女性が自分のことをわかってくれているのかどうか、不安になることがあるというのじゃ。このとおり、言葉の壁もあることじゃけ、不安になるのもわかる」

「ヒューー」

ジョニーが、うつむきがちに体を揺らす。

「そこでじゃ！ ジョニーが想っていることを紙にしたためて、相手の女性に恋文にして渡す計画を思いついたのじゃ！ どうじゃ、素晴らしい計画じゃろつて！」

ふむ、とうなずいて、シャルロットはジョニーを真つすぐに見た。「実現すればたしかに素晴らしいが、それは不可能ではないのかな？」

真丸の体に、異様に短い手。たしかに、字を書くどころかペンが持てない。

シャルロットが正論を口にしたことに驚きながらも、エリスンもそれに賛同する。

「あたしもそう思うわ。字なんて、書けるの？」

「もちろん、書こうと思つてすぐに書けるような甘つちよろいもんじゃなか。特訓に特訓と重ねる必要があるわいな。そこでジョニーは、毎日ここにかよつて、字を書く特訓をしていると、そういうわけなんじゃ」

「ヒューー！」

勇ましくジョニーがうなずく。つまり、浮気どころか愛のための努力であつたというわけだ。

ジョニーは、ふよふよと飛んで机の上にあつた大きなペンを転がしながら持つてきた。そのペンには、何やら長い紐が絡み付いている。

「ジョニーは、それこそ血のにじむような特訓をした。そしてついに字が書けるようになったんじゃ！」

マリアン又は、ジョニーの持つてきたペンを手を取った。それを

ジヨニーの身体に器用に縛り付ける。身体全体で字を書くというこ
とらしい。

「なるほど、そうするのか。それならば、ペンをどうやって持つのかという問題は解消されるな」

「なんだか、できそうな気がしてきたわ」

探偵とその助手も、だんだんその気になってきた。

「おぬしら、これからジヨニーの相手の女性のところへ報告に行くのじゃろ？」

ならば、ジヨニーとのでいとのせつちんぐをしといてもらえんかの。ジヨニーが恋文を持って現れて、誤解も解けて愛も深まって、まさにハッピーピピじゃ！」

マリアン又はシャルロットとエリスンの背中をばしばし叩くと、豪快に笑った。

「浮気じゃ、ない？」

噴水広場でずっとジヨニーを待っていたキャサリンは、現れた探偵からの説明を聞き、小さく目を見張った。

「それは、本当なんですか？」

「浮気ではないということは確かですわ。でも、いまはそれしかいえないんですの」

「このまま、ここで待っていてください。そして詳しいことは、ジヨニーさん自らの口から聞けばいい」

「……………」

太陽は、早くも低くなりはじめ、夕暮に近づこうとしていた。しばらくうつむいていたキャサリンは、決心したように顔を上げる。

「……………わかりました。わたし、待っています」

さて、セッティング完了だ。

「お待たせいたしましたー、フルーツパフェと南国パンケーキでございます」

カフェの窓際に腰をかけ、シャルロットとエリスンはじつとキャサリンのいる方向を見つめていた。キャサリンと一緒にジョニーが来るのを待つほど野暮ではなかったが、かといっておとなしく帰るような常識人でもない。

「ジョニーさん、いじらしいところあるじゃない。字を書く練習を
していただなんてね」

フルーツパフェをつつきながら、嬉しそうにエリスンがいう。南国シロップをパンケーキにかけ、シャルロットはうなずいた。

「字を書けるようになったということは、言葉の壁がなくなったということだな。我々にもジョニーさんとコミュニケーションをとる術が与えられたということだ」

「そうね、わくわくするわね」

話しながらも、お互い今朝とほとんどかわらないメニューの征服に取り掛かる。散々歩いた拳げ句昼食を抜いたので、空腹でたまらなかつたのだ。

空は赤く染まり、いよいよ陽が沈もうとしていた。キャサリンはベンチに腰掛け、じつと待っている。浮気ではないといわれても、きつと気が気ではないだろう。最愛の人（生物）が毎日自分のもとから姿を消すのだ。その不安と悲しみは、想像に難くなかつた。

と、キャサリンがふと顔を上げ、振り返った。

「シャルロット、見て！ キャサリンさんが……」

「ふむ。ジョニーさんが来たようだ」

二人はべつたりとカフェの窓に顔をつける。今朝もこの二人の相手をした従業員はもはや慣れたもので、一瞥すらくねずにせつせと仕事を続けている。

見ると、夕日をバックに、ジョニーがゆつくりと飛んできていた。その表情は非常に男らしく、手には封筒が握られている。

キャサリンは、そっと立ち上がった。スローモーションで両手を

顔に当て、首を左右に振って走りだす。

「ジョーリーリーリーリーリー！　　っていつてるわよ、きつと」

「いいタイミングだな。そんなところだろう」

反比例して、探偵とその助手は冷静極まりない。

キャサリンとジョニーはお互い走り寄って、ぎゅっと抱き合った。遠目にも、二人のラブラブっぷりがうかがえる。夕暮どきとはいえ、広場にはまだ何人かの人が出たが、みな見てみぬふりをしていった。

「相変わらず、熱いわねー」

エリスはもはや遠い目をしている。

ジョニーは、キャサリンからそっと離れた。そして、手にしていた封筒を手渡す。キャサリンは小首を傾げ、封筒を開け……

彼女の目から、涙があふれだした。手紙という行為そのものに感動したのか、手紙の内容に感動したのかはわからなかったが、ほほ笑みながら涙を流し、もう一度ジョニーを抱き締める。

二人の盛り上がり度は絶頂に達していた。従って、探偵サイドは根底まで盛り下がっていた。

そのとき、突然風が吹き抜けた。思わず髪をおさえたキャサリンの手から手紙が離れ、風にさらわれる。

「手紙が……！」

エリスが思わず立ち上がる。

ペシャリと、飛んできた手紙はカフェの窓に張りついた。ちょうどいい具合に文面が二人に見えるように張りつき、二人はそれを見て、言葉を失った。

そこには、右左に曲がりくねった太い字で、

「ヒュイ」

と、ただ三文字が、書かれていた。

「本当にすみませんでした！ ジョニーが浮気しているだなんて……でも、ちゃんと、誤解も解けましたし、今はもう……」

「ヒューー！」

「そうね、ジョニー。わたしたちの愛は永遠よね」

翌日、シャルロット探偵社にお礼をいいにきたキャサリンとジョニーは、ピンク色のオーラをまとわせ、見ているほうが疲れてしまふほどだった。どうやら、恋文作戦は予想以上に大成功だったようだ。

「……それは、よかったですね」

辛うじてエリスンが発した言葉に反応して、キャサリンが満面の笑みを浮かべる。

「ジョニー、字がかけるようになったんですよ。昨日なんて二人で筆談してたらいつのまにか朝になって……そうだ！ ジョニーがお二人に感謝の気持ちを表したいからって、手紙を書いてきたんですよ！」

シャルロットとエリスンの表情が引きつった。

「ほら、ジョニー、手紙をお渡しして……」

「あのっ！ ……ジョ、ジョニーさん、手紙なんてただかなくとも、お気持ちは十分わかりましたから……」

「遠慮しておこう。手紙の内容など、わかっていることだし……」

「ヒューー」

ジョニーが、首を傾げる。

不思議そうに瞳を瞬かせ、キャサリンは二人に問い掛けた。

「じゃあ、手紙、いらないんですか？」

『いりません』

声をそろえて、きっぱりと二人は断った。

どうやら、言葉の壁は、そうそう越えられるものではないようだ。

舞台はフォームスン探偵社。

今回たいした活躍もしなかったが、たいした馬鹿もしなかった名探偵シャルロット。フォームスは、肘掛椅子に深く腰掛け、パイプに火を灯す。

それからこちらに気づき、疲れたように息をつくど、片方の眉を上げて一礼する。

「やあ、こんにちは、みなさん。今回も、このシャルロット。フォームスンの活躍を、楽しんでいただけただけなことと思う。とはいえ、私はろくな活躍はしなかったのだがね。それは、優秀な助手であるエリスン君についても同じことだ。今回はどうも、キャサリンさんとジョニーさんに振り回されて終わった感があるな。まったく、疲れる依頼だった。……ジョニーさんの手紙が欲しいって？

それはまた、おかしなことをいいたしたものだ。欲しいのなら、いくらでも差し上げよう。あれから、ジョニーさんはここを訪れるたびに手紙を置いていくからね。山のようにたまっているよ。まったく同じ内容の手紙がね。要するに、口に出そうが紙に書こうが、そもそも違う言語を操っているのだから、相互理解などできるわけがないということだ。そういう意味では、キャサリンさんやマリアン又婦人は尊敬に値するね。そうなりたいとは思わないが。

ああ、今回は本当に疲れた。まったく、探偵稼業も楽じゃない。

……なに？おやおや、心配してくれているのかな。安心したまえ。また私が皆さんの前に姿を現す日も来るだろう。その時はもう少し、私の素晴らしい頭脳を駆使した活躍をお見せすることを約束するよ。はっはっはっはっはっ

高笑いが響き渡り、やがてシャルロットの姿が見えなくなってい

名探偵シャルロット＝フォームスン物語

i
n
·

暗
転。

く。

f

名探偵シャルロット＝フォームスン物語

s t o r y 2 ジョニーさんの恋物語（後書き）

幸せになってね、ジョニー。

Story 3 名探偵 vs 怪盗三面相

「怪盗三面相だ！ 怪盗三面相が出たぞおー！」

深夜の美術館に、叫び声が響き渡った。ばたばたと警備隊が走り抜け、やがて誰かの声で全員が空を見上げる。今にもなくなりそうな月が照らしだす夜空を、まるで鳥のように飛び去る影が一つ。逃げられた。だれもが悟った。

「くそう、怪盗三面相め……！ またしても、またしてもおおおー！」

「警部！ そのように声を張り上げては、近所迷惑でございます！」
「ぶわっかもおーん！ 近所迷惑もくそもあるかぁ！ 怪盗三面相に絵画を盗まれたんだぞっ？」

「はっ、そうか、ということはこの場合、近所迷惑というよりも美術館迷惑……！？」

緊迫した表情で悟りを開く下っぱを容赦なく殴り付け、ウノム警部はぎりぎり歯軋りした。

「このままですむと思うなよ、怪盗三面相……！ 次回こそ、次回こそ貴様をとつ捕まえてやる……！」

「警部、そのセリフは確か六回目でございます！」

夜空に向かって握り締めていたウノム警部の決意の拳は、もう一度下っぱに向かって振り下ろされた。

『夜空の華麗な絵画盗難事件』から数日後、ロンド郊外のフォームスン探偵社に、一人の客が現れた。

「どちら様？」

ゴージャスな衣服に身を包んだ、ブロンドの美人が扉を開ける。

客人は心なしか緊張して、完璧な気を付けの態勢をとった。

「わ、わたくし、レオディエールエントロツファレリティーノニア
ンジェスケリアントスと申します！ 本日は、お願いがあつて参り
ました！」

「……？」

ゴージャス美女が、眉をひそめる。果たして、今のバカ長いのは
名前であつたのだろうか。

すると、部屋の奥から、優雅な身のこなしの男性が姿を現した。

彼はパイプを右手に、ささやかな驚きの表情で、客人を見下ろした。

「おや、お客人かな、珍しいこともあるものだね。エリスン君、何
をしているんだい、どうぞご案内して」

「わかつたわ、シャルロット」

エリスンと呼ばれた美人に促され、客人は探偵社の中へと足を踏
み入れる。見ると、先程のシャルロットという男性は、すでに奥の
ソファに腰掛けていた。

「失礼します……あの、ここは、探偵社、ですよね？」

「ええ、もちろんですわ。ただ、お客さまなんて滅多に来ないから、
驚いてしまつて」

エリスンはさらりと問題発言をかましたが、ナルホドと素直に納
得して、客人もまたソファに腰をおろす。正面の壁には、「ヒュイ」

とかかれた紙が額に入れられて飾つてあつた。社訓なのだろうか。

「コーヒーと紅茶、どちらがよろしい？」

「はっ、どちらも、わたくしには勿体ないです！ お気遣いなく…

…」

「だって、そういうわけにもいきませんわ」

そういうわけにもいかなかったので、エリスンはテーブルの上に
ブラックコーヒーと紅茶、そしてナチュラルウォーター（水道水）
を用意した。ゴージャスなグラスに注がれたナチュラルウォーター
を受け取り、客人は感動する。

「ありがとうございます、わたくしのためにこのような……」

「お客さまですもの。当然ですわ」

この辺りの心遣いが、非常に微妙。

コーヒートをひとくち口に含み、シャルロットはゆっくりと客人を見た。その表情に、小さなほほ笑みを浮かべる。

「よくいらつしゃいました。フォームスン探偵社にようこそ。私が、名探偵シャルロット＝フォームスン。そして、こつちが……」

「助手のエリスンですわ。初めまして」

「は、初めまして、よろしくお願ひします！ わたくしは、レオデイエールエントロツファレリティーノ＝アンジエスケリアントスと申します！」

長い沈黙が落ちた。

シャルロットは、優雅にパイプをくわえた。

「……失礼ですが、もう一度？」

「はっ、レオデイエールエントロツファレリティーノ＝アンジエスケリアントスでございます」

再び、沈黙が落ちる。これは、覚えられない。二人は確信した。

エリスンはほほ笑みながら、白いシャツに茶色のサスペンダーが眩しい、このいかにも実直そうな青年に話しかける。

「由緒あるお生れなんでしょうね、立派なお名前だわ」

「はい、アンジエスケリアントス家の始まりはロンドドの街が出来上がる以前にまでさかのぼると伝えられておりまして、初代アンジエスケリアントスであるキリアンセツエリアーノンケリア＝アンジエスケリアントスが町の住民の反対を押し切り、当時敵対していたウォンケルバードリアンケスチエ家のセイラシエーヌロリアンとの結婚を機として……」

「それは、たいへん素晴らしいお家柄だわ」

適当に話を打ち切って、エリスンは先程の自分の軽はずみな言動を後悔した。

もう一度、優雅にパイプをくわえ、すべての固有名詞を聞き流していたシャルロットが、客人を見やる。

「覚えやすいニックネームなどは、ないのかな？」

「はい、ニックネームは『下っぱ』でございます」

「覚えやすいにも程がある。」

「なるほど、ではミスタ下っぱ、今回は、どのようなご用件で？」

「ミスタをつければどうなるという問題でもなかつつ。」

「はい、そのことなのですが……」

「声をひそめて、下っぱは注意深く辺りを見回した。」

「……この部屋に、盗聴などの危険はございませんか？」

「盗聴……？」

「または、何者かによって見られているとか、そういうことは……」

「……………」

眉をひそめて、エリスンがシャルロットを見る。若き名探偵は、おもしろそうに唇の端を上げた。

「ミスタ下っぱ……貴方がこの探偵社に訪れたお客さまである以上、そのプライバシーは厳守しよう。もちろん、盗聴などの危険性はない。少なくとも、私は知らないね」

この男の実績も評判も知らないがゆえに、下っぱはあっさりと信用した。

「それはよかった！ では、さつそく本題に……」

下っぱは身を乗り出し、ぐぐくと顔をのばした。シャルロットもずずいと身を乗り出す。エリスンもズームアップで顔を近づけてみた。

まるで睨めっこ大会だ。

「……実は、怪盗三面相から、予告状が届けられたのです」

「……予告、状？ ほほう、この名探偵シャルロットに予告状などと身のほど知らずもいたものだな！」

「いえ、予告状はターゲットにされた美術館に届けられたのですが

……………」

「はっはっはっ、宛先を間違えるようじゃあまだまだだな！」

「まったくだわ、失礼しちゃう！」

「……………」
そうか、怪盗三面相はシャルロット＝フォームスン宛てに予告状をだしたのか。気づかなかった。そんなことにも気づかないなんて、ああ、だからわたくしはいつまでたっても下っぱなのか……！ などと下っぱは勝手に感銘を受けたが、その大いなる間違いを訂正してくれるような人種はここにはいない。

「その、予告状ですが……今夜ビンバ美術館にある、幻の宝石ビビンビーンを盗む、という内容のものでございまして……。わたくしはこうして、なんとか盗みを阻止すべく、優秀な探偵様を探している、という次第でございます」

びくびくしている下っぱとは対照的に、シャルロットは優雅にパイプをふかした。

「ふむふむ、なるほど……。ビビンビーンのこととは聞いたことがある」

「今週号の週間ゴージャスにも載っていたわ。光の加減で色が変わる、それは素晴らしい宝石だって」

いいながら、エリソンは週間ゴージャスを持ち出す。巻頭特集は皮肉にも「大注目！ なぞの怪盗三面相、今週のファッション！」だ。

「そうです、ビビンビーンは先週の始めに、パリンの美術館から運ばれたものなのでございますが……その美しさ、その話題性に目をつけたのでございましょう。しかし、ここでビビンビーンがまんまと盗まれるようなことになれば、友好都市であるパリンとロンドドの信頼関係にひびが入ってしまいます……いや、これはもう、国際問題に発展しかねない、大問題なのでございます！ どうか、どうか、ビビンビーンが盗まれるのを、阻止していただきたいのです……

……！

「よしわかった引き受けよう」

極上の笑みでシャルロットはあっさりオーケーした。エリソンもここにこと微笑んでいる。

こんなに事件らしい事件の依頼らしい依頼は初めてだ。名探偵の名を一気に世間に広めるチャンスでもある。

「幻の宝石ビビンビン、必ずやこの名探偵シャルロット＝フォームスンが守りぬいてみせよう！」

「あ、あ、ありがとうございますーっ」

下っぱは両手を組んで、祈るようにシャルロットを仰ぎ見、はらはらと涙をこぼした。名探偵を連れてこい、と上司にいわれて途方に暮れていたが、看板に「名探偵在中」と明記してある親切な探偵社があつて本当に助かった。

「依頼成立ね。さ、ミスタ下っぱ、この書類にサインをお願いしますわ」

「は、はい！」

袖で豪快に涙を拭い、下っぱはサスペンダーをぱちんと弾いて気合いを入れた。渡された羽ペンで、さらさらと長い名前を印す。それから、ふと気づいて顔を上げた。

「いい忘れてましたが……今回は、怪盗三相を油断させるため、また盗聴などによる情報漏れを防ぐために、探偵を雇うということ自体を極秘裡に進めているのでございます。どこにも情報の漏れないよう、ご協力よろしくお願いします」

「はっはっはっ。なあに、お安い御用だ！」

すべてを包み込むような（何も考えていない）さわやかな笑顔（阿呆面）を見て、下っぱは安心した。エリスンに書類を、シャルロットには地図を手渡す。

「念のため、地図を用意しました。何かと準備もあると思いますので……わたくしは先に行っております。なるべく早く、おこしください。お待ちしております！」

びしつと敬礼して、下っぱは礼儀正しく探偵社から出ていった。

ふふふふははははは、と沸き上がる笑いをこぼし、シャルロットはエリスンにコーヒーのおかわりを要求する。

「名探偵と怪盗の対決か……！ おもしろくなりそうだな！ はあ

っはっはっはっはっ！」

「シャルロットの所に依頼がくるなんて、ロンドドーの名探偵を認められたということね！ この私の知名度も上がるかしら。 ふふっ」

どこまでも平和な名探偵とその助手であった。

鳥のように空に舞い、鮮やかにターゲットを手に入れる、超美男子怪盗三面相　今週のファッションは、赤を基調にした中世風。白いラインが夜空によく映える。評論家も「そうねえ、はつきりいつて完璧ね。なんていうの、自分の魅力をよくわかってるって感じ？　　こういう格好をすれば似合うのか、ちゃんとわかってるのよね。とくにこの靴、靴がまたいいわ。この日盗んだ、ほら、あの『黄色い海』っていう絵画を意識しているのね。ここだけ綺麗な黄色をもってきてるのよ。ポイント高いわね」と絶賛！

「とかなんとか好き勝手かかれて悔しくないのか貴様らー！！！！！！」

ウノム刑事は週間ゴーシヤスをベリベリべりつと豪快に破り、部下たちに怒鳴り散らした。彼は悔しかったので、いつもよりお洒落をしている。

「それはもちろん、悔しいでございます！」

反論できない部下たちのなかで、唯一レオディエルエントロツファレリティーノ（下っば）が意見する。

「悔しいです、悔しいに決まっています、だから……」

下っばはほんのり顔を赤らめて、身につけた赤い蝶ネクタイを示した。

「奮発して、これを、買っちゃってしまいました……！」

「そうだ、それでいい！」

いいのか？　と、部下一同のなかで思う者も少しだけいる。思わないものは、皆それぞれお洒落をしていた。

「このビビンバ美術館の警備は万全だ！ 我々は！ 今日こそ！
死ぬ気で！」

怪盗三面相の野望を！ 阻止！ せねばならんのだ！！」

ウノム刑事は、透明ケースのなかにしまわれたビビンビーンを指
差した。こぶしよりも小さいその宝石は、今は淡い青色に輝いてい
る。

「頑張るぞー！ エイ、エイ、オー……！！！！」

『エイ、エイ、オー……！！！！』

いろんなところで何かがずれている。

一方その頃、名探偵とその助手は、やや道に迷ったものの無事ビ
ビンバ美術館に到着していた。

「ほう、なかなか古風な美術館だな」

「初めて来たわ。大きな所ね」

二人は、ぐるりと警備された美術館を、何やら感動した面持ちで
見やる。ターゲットにされている美術館というよりも、初舞台を見
る気分だ。

「それにしても、最近の警察は洒落ているな」

「そうね。警察も流行にのろつて動きでもあるのかしらね」

「だとしたらお笑い草だな！ 流行とはのるものではない、作り出
すものだ！」

はっはっはっといつものようにバカ笑いをかます。名探偵は今日
も上機嫌。

「ユーはいいことをおっしゃいますね。さすが、名探偵！」

突然、後ろから声をかけられた。振り向くと、金色の髪的美青年
が立っていた。

「もちろん！ なんならこの私が著した『名探偵の心意気』真理編
』を読んでみるといい。勉強になることだろう」

限定三冊の自費出版だ。

「イエス、ぜひそうさせていただきますで候。おや、頭に何かついてお

りますぞ？」

青年はにこやかに、シャルロットの頭に手をやる。そして、一輪の赤いバラを手に、わざとらしくおどろいてみせた。

「ワオ、これは素晴らしい！ あなたの頭についていたのは、こんなに美しいバラでござったよ……そうだ、これは、美しいレディにさしあげよう」

そういつて、エリスンにバラを差し出す。まあ、と恥じらってみせながら、エリスンはそれを受け取った。

「今日の花占い……バラは素敵なトキメキ気分。ビューティフォー！」

ビューティフォー！ のポーズをとって、青年は笑いながら歩き去っていった。

「おもしろい人だな」

「そうね。いまだき珍しい好青年ね」

バラを見つめて、エリスンは微笑む。トゲは取り去られていた。

「……あら？ シャルロット、あなた、そんなに頭大きかったかしら？」

「はっはっはっ、君はおもしろいことをいうなあ！ 頭の大きさがそう簡単に変化するわけがないだろう！」

「そうよね」

そして二人は美術館に向かって歩きだす。明らかにこんもりと大きくなった頭に、シャルロットは「おや頭が重いなあ」などと感想をもらした。

「怪盗三面相対策本部」へと通され、シャルロットとエリスンは一瞬言葉を失った。

「……パーティーか、なにか？」

やっと、エリスンが問いを口にする。ばっちりお洒落な警察の面々を前にすると、日常的にゴージャスなエリスンがまるで普通の女

性のような。

「これはこれは、シャルロット様にエリスン様！ お待ちしておりました！」

エリスンの問いは軽く流して、赤い蝶ネクタイの下っぱが現われた。もともと憩いの場として使われているらしいホールの前へと二人を促し、皆に紹介する。

「こちらが、名探偵シャルロット＝フォームスン様でございます！
そして、こちらが助手のエリスン様！」

「いかにも。名探偵シャルロット＝フォームスンだ」
「エリスンですわ」

一瞬、ざわめきが起こる。誰だそれ、聞いたことないぞ、という類のざわめきと、なんであいつあんな頭でかいんだ、というざわめきだ。しかし一同は、前者については「名探偵」と紹介されてしまった以上納得する他なく、後者についてはまあ世の中にはいろんな人がいると納得した。

ウノム刑事が、威厳のある態度で前へと進み出た。

「ようこそいらっしやいました。ウノムです。今回の事件の担当刑事です。どうぞよろしく」

「うむ。よろしく」

男二人はがっちりと握手を交わす。

ウノムは二人に席を用意させ、それからごっほんどと咳払いをした。先端に指マークのついた細長い棒を構え、ホワイトボードの前に立つ。

「では、名探偵先生がいらっしやったところで、もう一度状況説明を。今回ターゲットにされているのは、フランスのパリンからこのイリギリスのロンドドへと移されたばかりの、幻の宝石ビビンビーンだ。これは世界的な宝だが、名目としてはフランスからの預かりものとなっているという点からも、決して盗まれるわけにはいかないものだ。そして今、ビビンビーンはこのビビンバ美術館の最上階に展示されている状態だ。怪盗三面相は、人に危害を加えないといわれ

ているが、念のため美術館関係者には安全なところにおいてもらっている。よって、今現在この美術館にいるのは、我々警察関係者、もともと警備にあたっていた警備員、そしてシャルロット先生、エリスンさん、ということになる」

一気に話してから、ウノムはもう一度咳払いをした。

「では、シャルロット先生のご意見をお聞きしよう。怪盗三面相からビビンビンを守るために、どういった対策をお考えで？」

シャルロットは不敵に笑った。厳粛な場であるにもかかわらず、優雅にパイプに火をつけ、ふかしながら立ち上がる。立ち上がるときに、頭の重みでちよつとふらついた。

「なにも、難しく考えることはない」

若き探偵はゆっくりとホワイトボードの前を歩く。そして、そこにはられたビビンバ美術館の見取り図のある一点に、人差し指を置いた。

リンゴの間、とかかかっている。

「ここだ。リンゴの間に、ビビンビンを置く」

簡単な算数の解き方を教える教師のように、彼はいい放った。場が、さらに静まり返る。

あまりにも当然のようにいわれたので、誰もがその理由を問うことを忘れた。

「リンゴの間に警察は三人でいい。あと、私とエリスン君もそこに立ち合うとしよう。主にそのまわり、廊下や出入可能なあらゆる場所を重点的に警備だ。以上」

シャルロットは一同を眺める。なにか質問は？ という目だ。

誰も何もいわないので、一礼して、席に戻った。一礼したときに頭の一部がごとんと落ちて、いつものサイズに戻ったが、それについてもノータッチだった。

「ごほ、っと、ウノム刑事が控えめに咳払いをした。

「……では、そういうことだ」

どつやら本当にそういうことになってしまったらしい。

探偵の頭に仕掛けた盗聴器から一部始終を聞いていた怪盗三面相は、美術館を見下ろして、にやりと笑った。馬鹿な探偵だ。やはり、自分の敵ではない。

「イージー！ 幻の宝石ビーンビーン、かならずミーがゲットするでありますよ……！」

笑いがこらえきれず、彼はもうすぐ暮れる空に向かって高笑いをぶちかました。

太陽が、完全に隠れた。

夜の訪れだ。

「怪盗、怪盗、それは悪党 探偵、探偵、それは天才 それは私 それは私 っそれは っそれは シャルロット＝フォーム

ム スーリーーン」

歌は意外にうまかった。得意げに歌い終わると、こほんと咳払いをし、真面目腐った顔でいつものパイプに火を灯す。

エリソンはロングスカートをたくしあげて展示ケースに堂々と腰をおろすと、さして大きくもない展示室を見渡した。自分とシャルロット以外に、人はいない。

ここは、ミカンの間だ。

「どうして、ここなの？ ビーンビーンのあるリンゴの間にいるって話しじゃなかった？」

ふっふっふっ、と名探偵は低く笑う。

「何をいつているんだい、エリソン君。馬鹿正直にリンゴの間についてどうする？ 敵の裏をかかなくてはね！」

「……いいいたいことはわかる気がするけど、裏も表もないと思うわ、この場合」

「はっはっ、だから君はいつまでたっても助手どまりなのだよ。敵

を欺くにはまず味方から、というだろうか？」

「……………」

今度は、いいたいことすらわからなかった。なんとなくそれっぽい言葉をそれっぽく使っているだけなのではないか、という嫌な予感を胸に、エリスンは額にしわを寄せて黙り込む。さすがは助手、大正解だ。

「もちろん、理由はそれだけではない。私がさきほど、ビビンビーン場所にリンゴの間を示したのはなぜか、わかるかな？」

「リンゴが食べたかったからでしょ？」

「うむ、その通りだ！　そして私は今、ミカンが食べたいというわけだよ！

はっはっはっはっ！」

それはさすがに怪盗にもわからないだろう。

「……………」でも、シャルロット。この、ビビンビーンも置いてないっちゃな展示室にいて、いったいどうなるというの？」

エリスンが、もっともな疑問を口にした。いい質問だ、と、シャルロットがかた眉をはねあげ、優秀な助手を見る。

そして、ぷはぷとパイプをふかした。

「私も今、ちょうどそれを考えていたところだ」

救いようのない名探偵だ。

「いやあ、それにしても、名探偵さまがきてくださるだけで、なんかこう、どんとこいってー気持ちになりますなあ」

「うむ！　さすがは名探偵、威厳があるな！　このリンゴの間に絞るときの決断力といい、あっぱれだ！」

「わたくし、がんばって名探偵様をお探した甲斐がありましたよ。いやほんとに。これで今回は安心してございますね！」

「まったく！　わはははははは！」

カンドン警備員とウノム刑事、そして下っぱは、わきあいあいとリンゴの間で談笑していた。あとで皆で飲みに行きますか！　お、

いいですなあ！ と、平和極まりない会話をかわす。

「そういえば、シャルロット先生たちは、いったいどこへ……？」
と、ウノム刑事が疑問を口にしたときだった。

突然、部屋のあらゆる照明が消えた。

「！？ なにごとだっ？」

「う、うわあ！ 刑事、何か、上から……！」

「なにいつ？」

続いて、ガシャアンとガラス類の割れる音。

「カンドン！ 明かりを！」

「は、はい！ ただいま！」

警備員の手によって、明かりが灯された。

三人が取り囲んでいた展示ケースは粉々に砕け、中のビビンビーンはその姿を消してた。

「か、か、怪盗三面相だー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

ウノム刑事の叫び声が、美術館中に響き渡った。

天井の上を身を屈めて移動しながら、怪盗三面相は釈然としない思いを抱いてた。

あつさりしすぎている。今回は探偵まで雇われたので、警戒していたのだが。

「……ワンダー。リンゴの間にいるはずの探偵もいらっしやらないです」

小さな声でつぶやき、足を進める。

そして、気づいた。

「そうか……！ ミーとしたことが、ジャストだまされるところであつた……！」

立ち上がろうとして、したたかに頭を打ち付け、ツイテ〜とつとつづくまる。

「これはトラップに違いないでござる……！ ふふふ、シャルロット＝フォームスめ、この怪盗三面相を罠にはめようなどと片腹痛

エリスンが、シャンデリアより少しずれた辺りを指差した。天井に、曲線が描かれている。

「……？」

シャルロットも、そちらを見やる。曲線はゆっくりとのびていき、やがてマンホールほどの円になった。

そして、がぼんと天井が外れた。

「アイグラットウーシュー……！」

「！？ 何？」

天井から聞こえた声に、さすがにまったり気分から復活して二人は立ち上がる。穴からボールが投げ込まれ、床と激突した衝撃で破裂した。もくもくと煙が立ち上る。

「エリスン君！ 目と耳と鼻と口をふさぐんだ！」

「ええ！ ええっ？ どうやって!？」

しかし、煙は危惧したような毒性のものではないようだった。部屋を覆いつくしたのち、やがて晴れていく。

煙の晴れ間から、一瞬縄梯子が見えた。

「トウワイス！ またお会い致した、お二方……！」

天井から飛び降りて着地しましたというポーズで、黒いマントの青年が二人の前に立っていた。

ゆっくりと顔を上げ、二人を見て不敵に笑う。その金色の髪には、見覚えがあった。

「あ、あなたは、バラの花の人……！」

「イエス、レディー。しかし、親切なバラの花の人とは仮の姿、その正体は、華麗なる怪盗三面相！」

ということとはあと一面で面が割れるな、と二人は思った。

怪盗三面相は今日のファッションも完璧だ。黒いマントには孔雀の羽の模様があしらってある。ピエロのような全身タイツに、膝まである金の前掛け。羽を組合せたような派手な帽子を目深にかぶり、このままでも仮装大会で大賞をとれそうな出で立ち。

「さあ、名探偵！ 本物のビビンビーンを、レッツ渡すのであるよ

どれが敗因なのか。そもそも負けたのか？

「……こんな偽物をつかまされて、一瞬でも成功した気になるなんて、まったくもって情けない……！」

「わかればよいのだ、愚か者め」

怪盗三面相は、忌ま忌ましげにビビンビーンを投げ捨て、がつくりと肩を落とす。

そこへ、すかさず警察を呼びにいていたエリスンが現れた。

「ここよー！」

「ぬう、怪盗三面相め！ お縄を頂戴するぞー！」

ウノム刑事を筆頭に、中年男が続々と押し寄せる。

「シヤラアツプ！」

怪盗三面相は、鋭い眼光で一同を黙らせた。それからゆっくりとシャルロットに向き直る。

「シャルロット＝フォームスン……今回は負けを認めるで候。だが次こそ！ 次こそは！ このミーの野望を阻止することまかりならん！」

「望むところだ」

悠然とシャルロットが受けて立つ。

それを見て少しだけ笑みをこぼすと、怪盗三面相はまるで踊りを舞うように両手を広げた。その手には、長い棒が一本ずつしっかりと握られている。

棒を一振りすると、そこからばさあつと無数の羽が飛び出した。

「ではミーはこれで失礼する！ また会う日まで！ リメンバーー
ー！ー！」

彼は両手を物凄い速さでばっさばっさと振りつつ、窓から飛び降り、鳥のように逃げ去った。落下した。

「逃げられたー！ー！」

ウノム刑事が悔しさいっぱいで叫ぶなか、エリスンはいい知れぬ疲れを感じ、ゆっくりと首を左右に振るのだった。

結果オーライという言葉は、素晴らしいとしみじみ思う。

幻の宝石ビビンビーンは無事守られ、フォームスン探偵社はいつになくリッチだった。

「怪盗三面相は、改名を考えてるらしいわよ」

週間ゴージャスの特集記事を見ながら、エリスンが懽然としてもらす。

いつもの、暇で平和な昼下がり。事件は、怪盗三面相の唯一の失敗談として語り継がれ、その哀れみを誘い、人気はますます上昇。名探偵の活躍は微塵も報道されなかった。

「ふむ。そうやって第三者の言葉にすぐ惑わされる辺りがまだまだだな。愚かな若者だ」

シャルロットは新調したコーヒークップをテーブルに置くと、愉快そうに唇の端を上げる。それを見て、エリスは溜め息を漏らした。

「あなたのいうことは時々すぐもつともらしいけど。今回の壮大な結果オーライが報道されなくてかえって良かったのかもしれないわね。あとで大恥をかくだけという気がするわ」

「はっはっはっはっ」

珍しく否定の言葉はない。少しは自覚があるようだ。

「あ、そうだ、あなたあてに手紙がきていたのを忘れていたわ」

そういつて立ち上がり、エリスは扉の横のラックから金色の封筒を取り出すと、シャルロットに手渡した。

「私に手紙？ 珍しいな」

「あなた友達少ないものね」

シャルロットは、宝剣デザインのレターカットで封筒を開く。中の便箋も金色ラメ入りで、悪趣味極まりない。

便箋を開けると、きらきら輝く文字が連なっていた。

拝啓 シャルロット＝フォームスン殿

今回の事件でミーは鱗から目が生えまして候。つきましてはより素晴らし い怪盗になるために、ユーの探偵社に助手として雇ってはいただけぬか？

良い返事をお待ち申し上げます。

敬具

怪盗三面相

シャルロットはさわやかに笑った。

エリスンも朗らかに笑った。

「エリスン君、差出し人の住所を、警察に連絡して」

「ええ、わかったわ」

「ああ、それからこの手紙の返事は、ジョニーさんに代筆してもらうとしよう」

「いい考えね」

そしてシャルロットは、便箋で紙飛行機を折り、からからと窓を開ける。軽く勢いをつけて、紙飛行機を放した。

舞台はフォームスン探偵社。シャルロット「フォームスは、コーヒーカップを手に、肘掛椅子に腰掛ける。

それからこちらを見て、おどけて肩をすくめると、少し眉を上げて笑みを浮かべてみせる。

「やあ、みなさん、こんにちは。今回の活躍はいかがだったかな？ 前回約束したとおり、この私の素晴らしい頭脳を披露することができて、私としては満足している。なんといっても、名探偵対怪盗だ。皆さんの期待に添えることができたのではないだろうか。

ああ、あれから怪盗三面相は姓名判断をして、結局改名しないことにしたようだ。せっかく住所をお教えしたのに、警察は彼を捕まえることはできなかったようだね。まったく、またこの私のところに依頼にくるのだろうか？ 無能というのは哀れなものだね。私は天才に生まれて本当に良かったと思っている。おかげで、こうして毎日何不自由なく過ごしているのだからね。

む？ なんだ？ これはブラックじゃないではないか！ エリスン君も、こんな間違いをするようでは、困ったものだ。

おっと、失礼。では私はこれで。なあに、案ずることはない。またいつか、皆さんの前に現れることを約束しよう。これほど期待されてしまったのでは、裏切るのは罪になるからね。」

つづく高笑い。立ち上がり、コーヒーの文句をつけにダイニングへと移動するシャルロット。遠くのほうでいい争う声が聞こえてきて
暗転

story3 名探偵vs怪盗三相(後書き)

みんなガンバレ!

というところで、この物語はおしまいです。

最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。

楽しんでいただけた方が、万が一いらっしやいましたら、
評価感想などをぜひ!!! 何卒!!!!

狂喜乱舞致します。

続編も公開しております。よろしければそちらもどうぞ。

<http://ncode.syosetu.com/n2047c/novel.html>

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1642c/>

名探偵シャルロット＝フォームスン物語

2009年3月24日09時23分発行